



誰だって能力の衰えは認めたくないもの。認知症の受診をためらう人は多い。そんな人向けに、日常会話の調子から症状の兆しを判別するソフトができた。開発したのは、最先端のロボット技術を研究する名古屋工業大のチーム。ロボットの開発と認知症……。縁遠そうな両者の世界を、学生たちが結び付けた。

チームの一人、大学院生の渡辺恵太さん(三三)。「ツイッター」

研究者の役目

の書き込みから流行や傾向を自動分析するソフト開発が本来の研究テーマで「まさかお年寄りとは触れ合うことになるとは」と最初は戸惑ったという。認知症判定ソフトの開発は、二〇〇七年に介護関連の会社から研究室に持ち掛けられたのがきっかけ。以来、学生は三代目になる。

渡辺さんらは月に数回、大府市の国立長寿医療研究センターを訪ね、認知症患者の協力を得て、質問の受け答えを録音したり、脳波のデータを集めたりする。これらの作業は、学生の心に変化をもたらした。渡辺さんは「自分が面白く感じるものを見つけたい」と社会的役に立つと思っていたけど、目線が変わった」と話す。

指導教官の加藤昇平准教授は「大学の研究は未来のことばかり考えがちだが、現実の問題に解決策を見いだすのも研究者の役目」。一皮むけた学生の姿に目を細めた。(北島忠輔)

